

<b>Title</b>	黄寛重著：『宋代的家族与社会』
<b>Author</b>	山口 智哉
<b>Citation</b>	都市文化研究. 10 卷, p.137-140.
<b>Issue Date</b>	2008-03
<b>ISSN</b>	1348-3293
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
<b>Description</b>	書評
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20171213-135

Placed on: Osaka City University

黄寛重 著  
『宋代的家族与社会』

山口 智哉

(一)

宋代(960-1279)は、科挙が“立身出世の階梯”として前代をしのぐ社会浸透をとげた時代である。家柄を問わない、個人の能力が合否を左右する科挙は、あらゆる階層の人々に門戸を開いていた。そして同時に科挙は、ひとたび栄冠を獲得した人でさえ、いつ没落するとも限らないような競争社会を生み出すこととなる。このような特徴をもつ宋代社会において、個人ないし家族は、どのような上昇戦略を駆使してその社会的地位の維持につとめたのか、あるいは健闘むなしく衰退下降していったのか。本書は、家族という視角から宋代社会を論じるものである。なお本書が対象とする「家族」は、後述するように単なる夫婦とその血縁集団のみに限定されない、宗族(父系親族集団)や姻族をも含めた幅広い概念として用いられている。

本書の著者は、台湾の中央研究院歴史語言研究所研究員として宋代史研究に従事してきた。その著書には、『晚宋朝臣対国是の争議—理宗時代の和戦・辺防与流民』(国立台湾大学文学院, 1978), 『南宋時代抗金の義軍』(聯経出版事業公司, 1988), 『南宋地方武力—地方軍与民間自衛武力的探討』(東大図書公司, 2002), 『中韓関係中文論著目録』(増訂本, 中央研究院東北亞区域研究, 2000)などがあり、とりわけ南宋史を中心とする数多くの論考を発表され、いずれも国際的に高い評価を得ている。

本書の特徴として、第一に著者の多年にわたる墓誌資料の整理・研究を基礎に、士人家系の詳細な復元を目指したことが挙げられる。族譜資料の乏しい宋代史にとって、特定士人の生涯やその家族の状況について墓誌銘を利用することは、決して目新しいものではない。しかしながら著者は、文集等に掲載された墓誌銘にとどまらず、従来あまり顧みられなかった新出の出土墓誌にも注目し、その成果を本書にも活かしている。

第二の特徴として挙げられるのは、本書の家族分析が家族成員の経済的・教育的な経営という内在的要因と、個人や家族とその外側の人間との相互活動という外在的要因の両側面を重視している点である。特定の一家系を検討すると、ややもすれば内在的要因ばかりを注視してしまい、後者の考察はせいぜい婚姻関係に限られる研究が多い。本書第二篇で扱われる明州の4つの家族の事例は、いわばタテ糸に個々の家族の軌跡をつむぎ、ヨコ糸に相互の交流を編みこんでいくことで、明州地域社会という図柄を浮かび上がらせようとしている。著者の念頭

には、つねに家族の先に社会が存在しているのであり、本書のタイトルもまた、そのような意図からつけられている。

本書の構成は以下の通り。紙幅の都合上、第二篇を中心に紹介することとし、第一篇と第三篇は省略する。

緒言

第一篇 墓誌史料与家族史研究

第1章 近五十年中国出土宋人墓誌史料

第2章 墓誌史料の価値与限制—以兩件宋代墓誌資料為例

第二篇 四明家族群像

第1章 發明本心—袁氏家族与陸学衣鉢

第2章 千糸万縷—樓氏家族的婚姻圈与鄉曲義莊の推動

第3章 真率之集—士林砥柱的汪氏家族与鄉里文化的塑造

第4章 洛学遺緒—高氏家族的學術与政治扶抉

第三篇 江西家族群像

第1章 鄉望与仕望—厚經營的張氏家族

第2章 武功与文事—程氏家族由族而家的發展

結論：科挙社会下家族的發展与轉變

(二)

まず「緒言」部分では、家族史研究の回顧と本書の目的が述べられる。1980年代以降、家族研究が盛んとなり、その多くが中型士人家族を中心とする事例研究・地域研究であった。こうした研究は、資料上の問題からどうしても成功者の記録が失敗者の記録に比して多くなる。したがってその理解は限定的とならざるをえない。本書の研究対象は、四明(明州, 浙東寧波)と饒州(江西)の6つの家族である。各家族發展の内在的要因とその変化を観察しつつ、さらに家族のソトに向けた發展戦略、およびこれによって形成される家族間相互の地方における共同事業の成果をみる。というのも、地域的な政治・社会・文化活動の様相は、個人が家族から出発して社会の交差点で成立する複雑な関係ネットワークであり、家族間の相互活動は宋代の基層社会の現象を観察する重要な指標となるからである。本書は、主として伝記資料(墓誌・行状・神道碑)を利用していきが、その性格から史料批判が重要となる。本書のねらいは、ケーススタディによる家族發展の諸相をみつつ、個人や家族とその外側の人間との相互活動をとらえ、地域社会の多様なイメージを提供すること、および家族という角度から、社会的流動性の問題や宋代に出現した士人家族の發展モデルが後世の中国社会にどのように継承されたのかについて考察するものと述べる。

つづく「第一篇」は、新出の墓誌を利用する有効性、および墓誌資料がもたらす新しい知見と利用上の注意点などについて述べる。

「第二篇」は、明州の4つの家族(袁氏・樓氏・汪氏・

高氏)を検討する。

まず第1章では、陸学(朱熹の論敵であった陸九淵の思想)の継承者として著名な袁氏家族の分析である。四明袁氏の士人としての地位を確立する契機は、袁穀(嘉祐6年[1061]進士)およびその息子袁灼(元祐6年[1091]進士)にあった。ところが袁垌(未登科)・袁文(1118-1190,未登科)父子の代は不振で、その勢力は一時衰えてしまう。その後、袁燮・袁甫父子が高第入仕して高官に至り、同時に陸学を継承し、南宋中晩期の名門望族となっていく。一族で合計16人の科挙及第者を出した袁氏ではあるが、ごく初期の世代を除けば、袁氏の経済状況はけっして改善されず、逆説的に称賛の理由ともなる「貧士」という評価が下されていた。そこで袁氏は、富家との婚姻による経済資本の獲得を目指し、妻たちの内助の功によって、苦しい経済環境にもかかわらず、教育・科挙の受験勉強を続けることができ、いったん没落した袁氏の士族としての地位を復興した。さらに陸学を推進して道統を継承し、教育の推進によって明州に名を挙げ、明州の学術文化史上に影響をもつ名族となったのだという。

第2章は、楼氏と郷曲義荘について論じている。楼氏の勃興と発展には、諸々の内在的・外在的要因が混成しており、彼らは、同学・同僚・交遊・婚姻などの方法で明州の著名な士人と広範に人間関係を取り結んでいた。さらに家族内部の教育や経済条件の改善、および族人間における凝集力の増強などの要因と結合することで、家族成員の学術・科挙受験・官界昇進・家族経営・資源獲得・社会的地位の上昇などの面で相補的な関係を構築した。とくに重要なのは婚姻であり、これは楼氏と他の士族間のつながりを友情・同郷意識から肉親の情にステップアップさせるものであった。また婚姻は学術流派の凝集力にもつながり、陸学の弟子間で婚姻を結んで学術を継承することで、明州が陸学発揚のセンターとなった。このような士族間の交友や集会は、郷の官僚と士大夫との情誼を結び、郷里の団結を増進するほか、地方意識の形成に有利に働いた。その好例が郷曲義荘である。宋代には、個々の家族が義荘(経済的互助組織)を設けたが、これは“家”を超えた“族”意識が存在していたからで、貧しい族人の救済にとどまらない、宗族内の各分派の発展を維持し、家族(宗族)全体の発展の基礎を拡大するものであった。郷曲義荘とは、郷里の人の救済施設であり、明州の士人たちが臨時的に行う慈善救済活動を常態・組織化した、家族を超えた社会的意義をもつ公益組織であった。これは、個別家族の盛衰への配慮から一歩進んで、郷里全体の士人階層に対する配慮である。このように地域の公共事業への参加は、科挙合格だけを基準とせず、個々の家族をより高い政治的社会的地位におくと同時に、他の家族との関係を緊密にして家族の利益お

よび家族自体を保護するものであったという。

つづく第3章では、汪氏と耆老会について述べる。汪氏が明州で発展を遂げたのは、ずいぶんと短い期間であり、汪思温・汪大猷父子が官僚となったものの、その地位は他の名族に劣るものがあった。ところが汪氏は、明州地域の公益事業や社会文化活動において指導的役割を演じている。その理由のひとつは、汪氏が持っていたボランティア活動に積極的に参加しようとする伝統であり、郷人や貶官に対する援助が郷党や朝臣の尊敬を得、幅広い人脈を結ぶことになった。また官僚の汪思温・汪大猷は罷免されて長らく郷里生活を送っており、理財・産業経営ばかりでなく、指導者としての気質をもつようになり、郷里の耆老や地方エリートとつながりを持ち、詩社のような集会を通じて特色ある地方社会文化活動を推進および郷里意識を増強させることになった。そうしたグループ活動の好例が耆老会である。耆老会は、①政治的・文化的要所において官僚・士人たちが結成するか、あるいは②地方の士人・官僚が結成する詩社であり、明州の詩社活動(五老会・八老会・尊老会・真率会)は後者の南宋における典型であった。この活動をみると、北宋以来の、高位高官の集まりを誇る“衣冠盛事”的伝統から“郷誼”を強める性格のものへという性質の変化がうかがえ、長年の交情によって社群はそれぞれの情誼を増強するばかりでなく、より容易に共通の関心をよびおこし、集团的観念を凝集させるようになったと述べる。

第4章は、高氏家族の発展およびその学術と政治的選択について論じている。高氏は、北宋中期に明州に移住、経済的成長ののち子弟の教育につとめ、初めて高碩が太学に進学することになった。また高伯欽の息子たち(高安世・高閔・高開・高閔など)が相継いで官界進出を遂げ、高氏を明州の士族たらしめた。また高碩の姉妹は、明州の名族に嫁ぎ、高氏の明州における社会関係の基礎を築くことになった。高安世をはじめとする第5世代は、高氏勃興の重要な段階にあたる。とりわけ高閔は、官職こそ高くないものの、太学制度や科挙の改革に参与し、修史や経学の研究にも大きな功績をあげ、また二程(程顥・程頤)の学を發揚して王学に対抗するなど、南宋初期に重要な貢献を果たしている。この高閔は、もともと趙鼎の推薦をうけたが、趙の弾劾に連座して罷免されると秦檜に接近して批判を浴びることになった。やがて秦檜政治の否定にともない、辞職して帰郷、以後は春秋学の著述に尽力し、積極的に郷里の文化活動(郷飲酒礼、詩社集会など)に参加した。こうした明州の名族との交流は、家族の発展はもちろん、明州における社会的地位の確立に裨益することになった。つづく第6・7代は、隆盛期かつ家族関係および明州士人との関係が変動する時期にあたる。高文虎・高似孫父子は高官に至り、韓侂胄に迎合して道学を排撃し、理学家と疎遠になってしま

う。この時期、高氏の家風は変化し、学術的には経学から史学や文学方面へと転向し、古物の収蔵やその研究に成果をあげるようになった。高氏は、郷曲義荘などで重要な役割をはたす一方、詩社集会では分裂し、理学家たちの集う集会とは相互に対立した。つづいて史彌遠・史嵩之らの専権時代になると、高氏の一族内でも対立が生じ、族人が他地方に移るようになった。明州士人間の政治対立・抗争は、それまで士人家族間の協働のもと、文化活動や公益事業を通じて培ってきた地方意識・社会文化・家族間の良好な関係に重大な影響を及ぼしたのである。そしてこれにあわせて、高氏家族もまた衰退していくことになった。

第三篇では、饒州の2つの家族について検討を加える。ただ、とくに明州との差異が論じられてはいない。

結論では、①家族発展、②家族と社会、③社会的流動性に関して、の三点について以下のように述べる。まず①については、家族勃興の契機が進士身分の獲得にあり、そのために経済力と教育が重要であったこと、また家塾・書院ないし州県学が同学という人的結合の場となり、進士合格を果たせば相互扶助を期待する間柄となったこと、さらに家族拡大の契機となる婿選び・嫁選びといった婚姻の重要性を指摘する。②について、官界内外の活動のなかで、郷里の人間関係を構築することは家族の発展にも重要である。郷里とは、士人が成長し、教育資源を獲得し、仕官栄達を追求する源なのであり、それゆえに士人は郷土に対する関心や熱愛を培い、郷里建設に尽力するのである。あるいは中央政界を離れた官僚やポスト待ちの官員、ないし退官者たちは、郷里で各種の社群を形成し、諸活動に興じて共属意識を高めていく。こうした活動が地方文化の普及や学術の向上に重要な役割を果たす。なお、こうした士人の郷里活動への参加は、南宋時期に限定されるものではない。したがって、南宋士人が中央や全国的な活動を軽視しているようにみえるのは史料上の問題に過ぎず、実際には北宋と南宋の間に連続性が存在しているという。また、士人の郷里活動は、郷土や社会改革に対する“思い”が動機になっており、たんなる功利という角度からのみ理解するべきではないという。③に関して、宋代には社会的流動性の高さに関する異なる見解が存在するが、これはサンプルの抽出と論証の方法がまねいた相違であり、宋代は競争性が強く・開放性の高い社会であったと考える。家族発展の成功不成功には、政治環境の変化・家族成員の寿命・家産継承の多少・家族の産業経営に対する興味と能力・生活に対する態度・家風の転変・家庭内部の調和・家族成員の認知・個人の資質と努力等々、さまざまな要因が存在した。たとえば恩蔭という入仕家族に有利な制度的保証も、長期的にみれば競争力を奪ってしまうもので、家族の発展には不利であった。また明清時代の家族（宗族）

経営との比較に関しては、宋代同様に仕官と関連するものの、政治的・社会的環境の変化に伴い、より多元化した発展戦略をとるようになる。婚姻戦略に関して、明清では家柄・身分の釣り合いを重視するほか、家産の確保に注意が払われるのであり、その点で父系親族だけでなく、母系親族を検討する必要があるという。総じて、中国の伝統社会においては、家族と個人が緊密に依存しあい、名族として科挙及第者を出さず、経済経営に尽力しなければ没落は免れなかったとする。

### (三)

本書は、墓誌銘をはじめとする伝記資料を利用することで、士人家族の勃興と発展、あるいは衰退という展開を詳細に跡づけた。とりわけ第二篇においては、明州という特定地域の有力家族を総合的に検討することで、彼らの地域活動をも射程に含めた地域社会の様相を従前に比較してより具体的に浮かび上がらせている。したがって、個人や家族とそのソト側の人間との相互活動をとらえ、地域社会の多様なイメージを提供するという本書のねらいは達成されていると考えられる。

また、本書の四明家族の考察は、これまで断片的に検討がなされるばかりであった寧宗・理宗以降の南宋後半期にも及び、各家族の社会的・政治的な地位の変動にも言及されている。四明士人が南宋時期の中央政治に与えた影響は贅言するまでもないが、南宋時期を通じての四明士人家族の発展ないしは衰退の様相を明らかにしたのは本書がはじめてとなる。本書は、宋元交替期をにらみつつ、四明の地方社会を俯瞰する際に重要な成果のひとつとなる。

いまひとつ、本書は、とりわけロバート・ハイムズの研究に影響を受けつつ展開した1980年代以降の社会史研究に疑義を投げかけているという点を挙げておかねばならない。ハイムズは、北宋士大夫と南宋士大夫の質的变化を強調し、南宋以降、士大夫が科挙を軽視して地域経営に力を入れるようになるなかで、明清時代に連続するようなローカル・エリート階層が固定化していったと論じる（Robert Hymes, *Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-chou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung*. Cambridge University Press, 1986）。これに対して著者は、本書の考察から彼らの地域活動がけっして永続的なものではなく、士人家族はつねに没落の危険を抱えており、それゆえに科挙合格が宋代を通じて社会における上昇移動の契機として存在し続けていたことを主張する。これは今後の社会史研究に対して、あらためてひとつの論点を提供したものだといえるだろう。

本書の注意点・問題点として、以下を挙げておきたい。まず第二篇について、本篇の叙述は、各章で個別の家族をとりあげる構成となっている。そのため、郷曲義荘や

郷飲酒礼をはじめとする士人たちの社会活動について各章で重複する部分も多く、読者は注意が必要である。

次に著者は、家族成員の成功のメルクマールとなる科挙合格を大変ひろい範囲で使用しており、進士科合格と特奏名合格、はては地方試験通過者(郷貢進士)一宋代には、制度上の身分として保証された地位ではなかった一をも成功者としてカウントしている場合がある(たとえば本書75頁を参照)。周知の通り、科挙合格には、おのずと段階的な差異があり、こうした実質的な身分の差異が家族発展のなかでどのような影響をもたらすものだったかについては、なんらかの説明がほしかった。

これまでの社会史研究には、南宋の地方社会をあつかう際の諸制度について、先行研究を十分に消化しきれていない部分や、未解明な部分が多かったという実感を抱く。従来の制度史が、かなりの部分で北宋偏重型にあったこと、また制度の大まかな整理が多く、その地方社会における制度運用の実態について、まだまだ考察が不十分であったことは事実であろう。このとき、主客戸制や戸等制の問題、州県学生や解試受験者が太学生や官僚となっていく昇級・昇進ルートの問題は、地方社会の構造を解明するうえでもなおざりにできない。地方社会を分析するツールとして、もういちど諸制度を考えてみるのが肝要であり、宋代の家族と社会に関するひとつの到達点を示した本書の研究成果を超えていく今後の課題ではないかと考える。

(東大図書公司, 2006年, (12) + 301頁)